

令和4年12月19日

第2回大田区多文化共生推進協議会

議事

実施スケジュール

○会長

協議会のスケジュールについて事務局より説明する。

○事務局

「資料1」に基づき説明

大田区多文化共生実態調査概要

○会長

次に、次第3「区の報告」に移る。大田区が多文化共生実態調査の概要について、事務局から説明する。

○事務局

「資料2-1」、「資料2-2」に基づき説明。

調査結果については、現在集計中。次回第3回目の協議会で報告する。

○委員

大学生の回答者はどれくらいいるか。

○事務局

大学生という分類では集計していない。学生という分類と年齢は集計しているので、整理すれば、おおよその把握が出来る。次回説明したい。

○会長

今回は、日本国籍区民の多文化共生に対する考えや、外国籍区民が抱えている問題について等の調査結果が出てくる。それを参考にしながら、多文化共生について議論を深めていきたい。

次に、資料の3に沿って、多文化共生、観光、産業の各分野の協議を行う。

まず、多文化共生について、事務局から説明する。

多文化共生の協議

○事務局

第1回目の協議を踏まえ、選定テーマは、①「外国人区民が参加しやすい地域社会づくり」及び②「来日直後など、日本の風習・制度等に対する親子の理解促進支援」に決定した。

①の現状として、区では、地域や学校における外国人区民との交流や多言語による情

報発信、災害時や国際交流の場面でのボランティア活動支援等を行っている。

②の現状としては、各種の相談や情報提供、通訳や証明書等の翻訳、受講生のニーズに合わせた複数の日本語講座の開催等を行っている。

①における課題は、外国人コミュニティの把握やキーパーソンの発掘が進んでいないこと等である。

②における課題は、外国人保護者にとって日本の学校制度や日本語の理解が困難で、学校の通知の意味が分からないこと等である。

具体策のアイデアとして、①は「外国人コミュニティとつながりがありそうな場所、人、団体への働きかけ」、②は、「日本語の支援を現在の拠点である蒲田及び大森で開催し、段階的に他地域での開催に展開する」ことを例に挙げている。

○会長

それではこれから、皆様の御意見を頂戴したい。

○委員

九州にある立命館アジア太平洋大学では地域密着のまちづくりを含め、大学生を受け入れ発展しているという事例を見聞きする。大田区には、国際大学と称するところがない。例えば羽田空港の跡地を活用して、大規模な大学を誘致すれば、空港と一体化した大学という世界でも珍しい取組になる。

様々な国の学生同士で交流が深まれば、そこにコミュニティが出来る。そして、大田区内には地域のコミュニティがある。例えば中華街は良い例であるが、大田区にも食堂を経営している関係者のコミュニティがある。国際大学の誘致をすれば、学生と地域の相互交流が図れて、密な関係が構築できる。若者が来れば、地域は当然活性化していくし、地域の人達が感化されて、大田区に住んでいる子ども達が、仲良くなった学生の国に行ってみたいと思うことが出てくるかもしれない。ぜひそのようなことを提案したい。

○会長

「若者が地域に力を与えてくれる」というのは非常に重要なことだ。大学の誘致は、すぐに答えの出る話ではないが、将来的に多文化共生の環境を高めていく要素のひとつということで、必要な観点である。

情報発信の際に、学生の力を借りたり、常日頃地域との交流を深めておくことで情報が伝わりやすくなる。そういった機能を整えていくことが大事だ。特に、大地震がこれから来ると言われている中で、そういったことも予想して備えておくのが、多文化共生

として重要だと思う。

○委員

外国につながるのある子どもたちの日本語教育に携わっている立場から提言すると、来日直後のプレスクール、あるいは日本語の初期指導が非常に重要だ。このことに関して、日本語能力の子ども向けアセスメントでDLAというものがあり、DLAを作られた先生にアドバイザーとして入っていただいているが、大田区の初期指導が60時間～80時間というのも非常に少ないということだ。

千代田区では、初期日本語指導が2年間保障されていることを考えると、区の方針や財政的な面も違うとは思いますが、まず一つ目に、日本語の初期指導が大田区では相対的に短いという課題がある。

加えて、やはり日本語教育の現場から一番重要視されているのは、移行期や中期指導である。学習言語の習得は最低でも5年から7年かかると言われる中で、大田区は全く指導等の支援がないのが実態だ。

私も子どもたちにDLAでアセスメントをしているが、DLAの初めの一步は、日本で生まれ育った小学校1年生が100%答えられる単語や名詞、動詞、形容詞だ。試しに年中の5歳の娘にも試したが、100%答えられた。それが、例えば来日2年目の中国籍の男の子に試すと、7割ぐらいしか答えられない。それなのに、学校で日本語は分かっていると見なされて授業を受けている。実態はそういったところがある。

例えば皆さんも英語で目は何と言われたら「eye」とすぐに出ると思うが、まつ毛は何と言われたら、すぐに出てくるだろうか。そのような細部の語彙力が外国人の子ども達は足りないので、移行期や中期指導と言われるところに、もう少し注力しないと、子どもたちはかなり学校の勉強に遅れを取ってくる。

日本の義務教育は、日本語が出来なくても中学卒業が出来てしまうが、その先の高校進学に障壁が出てきてしまう。外国籍でも日本国籍でも、外国つながりの子ども達でも、大田区の未来を支える子ども達には中学卒業時に義務教育の最低の保障が出来るように、ぜひ力を入れてほしい。

○会長

「子どもは国の宝、地域の財産」だ。外国籍の子ども達も地域で滞りなく暮らしていける方策を考えるための貴重な意見だ。

オーストラリアではAdult Migrant English Program (AMEP)という、他国から来た英

語が全く分からない人が移り住んできても、英語を話せるようになる制度が用意されていて、確実に地域の中で暮らしていけるようになる。

「来日直後など」と括られているが、将来的には、その「など」の範囲を広げていきたい。最終的に、日本の風俗、習慣を理解するうえで、何よりも言葉・日本語が重要であるという観点に立ち、特に中学期の子ども達、高等学校で進学をするような子どもたちが、日本語が分からないことで不幸にならない環境を作っておかないといけない。検討課題として、考えていただきたい。

○委員

就労している外国籍区民の区民相談で、例えば日本で働いている中で出産を迎えたり、病気で母国に帰国して診療を受けるときなど、税金や国保料等の手続をせず一時帰国し、その後、出産や入院治療を終えて日本に戻ってきたときに莫大な滞納になっていて、継続して働き続けることが困難になってしまい、生活や暮らしが立ち行かなくなってしまう方が何人かいらっしまった。

母国に帰国するときや、大田区で仕事をする中では、いろいろな決まりがあるということをきちんと理解しておかないと後々深刻な状況になるので、そういった適切な案内もお願いしたい。

○会長

非常に厳しい問題だ。外国籍の方は、例えば税金や健康保険料の滞納をすると強制退去になってしまう。一時帰国後の再入国時に滞納が分かると入管当局から再入国の許可が下りないとも仄聞している。

外国籍区民が参加しやすい地域社会づくりの一環として、色々な条件・事例を幅広く捉え、入国が出来ない等の危機的な状況を防ぐために当該住民に広く周知する必要がある。地域では、そのような情報提供の機会が少ないのが実態だと思う。殊に、地域で暮らしている外国籍の方はそう感じると思う。

肝心なのは、これから先も住民として住み続けてもらいたいのであれば、行政側でどこまでサポートできるかを考えた方がいい。

○委員

日本の行政は手続きによって担当部署が異なる。どこに行ったら用事が済ませられるか来日直後には当然分からない。一か所で手続きが済むところがあれば非常に助かる。教育のことや、病気になった時、毎月届く税金の支払書について等、色々と聞ける場所

があればとてもありがたい。

例えば来日後、移住してから期間限定で相談員が付く制度があれば住みやすくなる。ボランティアだとなかなか難しいかもしれないが、区の職員等が1対1で付くとベストだ。

○会長

役所に行く時には、日本人でも構えてしまうことがある。外国籍区民はそれ以上だ。行政のサービスを上手く行き届かせるためには「役所の敷居を下げる」ことが必要だ。また、地域でサービスを提供できる場を構えるかどうかについても、議論をしておいたほうがいい。

「面談制度」をすぐに実現できるかは難しいところだが、例えば、区長へ報告を上げる時に「面談」という案と、当該案が出された背景等も盛り込み、「より良い生活環境を作っていく」、「暮らしやすいまちの資源にしていく」という視点が必要なのでは。

○委員

外国人の方向けの区報や情報発信はあるか。

○事務局

外国人の方向けの区報の代わりとして、ホームページでの情報発信や、「Ota City Navigation」という紙面、「くらしのガイド」という転入者向けに配布している冊子を6言語で展開している。このような情報発信をさらに広げていく必要があるという認識は持っている。

○委員

区報は自治会で配られるが、まだ自治会に入っていない外国人には当然配られない。単にパソコンで見られるだけでは、外国から来た人がいきなりアプローチできるかというところが非常に難しいと思う。

区報は大事な情報源だ。区報等の多言語化の推進や、配布方法は非常に難しい問題かもしれないが、こういう情報物の充実をもっと図っていただければ。

○事務局

当課の今年の大きな課題として、外国人に対する適切な情報発信を挙げている。今のご意見もそういったところに包含されると認識している。これは終わりが無い話だと思うが、今できることを少しずつ、いろんなご意見を参考に進められるところは積極的にやっていきたい。

○委員

今日私が持参した区報に掲載の「フラットおおた」も、外国の方が利用できれば色々な意味でのサポートにつながっていく。ただ、写真を見ると日本人の方しか出ていないので、これを見たら外国人の方は日本人しか行けないのかなと思ってしまい、そういうところも考えていかないといけない。

○事務局

多言語版を作るということだけでなく、仰るような、伝え方も考えていく必要がある。

○会長

制度は作って終わりではない。「知ってもらい、使ってもらうこと」が大切だ。我々は「地域社会づくりのため」という大きな視点も持っているが、それだけでなく、「問題に直面している外国籍の当事者にとってもサービスが良くなった」と思ってもらえる提言につなげていきたい。

○委員

自分の子供は今、小学校1年生と5年生で、大田区の区立保育園に0歳から通っていた。妻が日本人なので、言葉の問題はないが、もし妻が日本人でなければ、入学式等の学校行事に対して、まったく自信がなかったと思う。そういうことに対しては、色々な配慮が必要だ。

入学式に出席したところ、同じ国の言語を話している方がいたので、連絡先を交換した。その方は日本語があまり分からず、学校の配布物の意味が分からなくて色々聞かれることも最初があった。出身国によっては、保護者で同じ国出身の人が居ないこともあるし、特に漢字が読めない方は多いと思うので、もっと配慮が必要だ。区が何かするより、一番状況を把握している学校の先生等が少し配慮していただけるとすごく助かる。

もう一つは、子供が保育園を卒園する時に、保育園の先生がとても親切で、外国人の子供が入学する際のチラシを沢山くださり、温かさを感じた。様々な配慮をすでにして頂いているが、まだ必要としている人は沢山いると思う。

外国の子供は、始めの内は友達を作りにくい。例えば、日本人の子供と外国人の子供がペアで参加するイベント等を設けると、割と上手く行くかと思う。

○会長

一番最後の「日本人の子供と外国人の子供がペアで参加するイベント」の話は、先ほどのメンターの話と関連する。サポートが居ないと、小さい子供が辛くなる部分は実際

にあるだろう。先ほど「来日直後に風習が分からない」とか、「学校の制度が分からない」という話があった。仮に、学校の制度が分からないとその場で教育が途切れてしまう。外国籍の子どもに関しては、教育は義務ではなく任意だからだ。ただ、その方が将来大田区に住み続けるとした場合、こうした環境が幸せかどうかといたら決して幸せではない。こうした状況を改善するためにも「イベントへのペア参加」が必要且つ有効で、非常に良いアイデアだと感じた。

先に来日している先輩を見つける方法として、例えば、外国籍住民のコミュニティ内でどういう方が活躍しているのか区で情報収集して、多言語のホームページで伝えていくと、先輩を知る機会が増えるので、それだけでも心理的な負担が減ると思う。

要は、「どう住みやすい大田区をつくっていくか」だ。外国籍の方だけでなく、結果として日本国籍区民の方にとってもプラスになる環境づくりが一番大切だと思う。委員の皆さんの意見を収斂させていただき、今後のを絞って検討していきたい。

課題が幾つかあるが、多文化共生のテーマに関しては、外国人が参加しやすい地域社会づくりが一番大切だ。コミュニティがどれくらいあるかが行政でも把握し切れていないが、これからコミュニティを把握していく中で、サポーターを見つけていく等、「困ったときに相談できる体制」を作ることが重要だ。コミュニティの中に日本人の方が加わっているのであれば、どのように連携をとり、どういうきっかけで参加したかを事例として紹介していくことも必要になるだろう。まず、外国人コミュニティの把握の仕方について。また、その後、行政としてどういうサービスができるのかという観点から、的を絞って議論させていただきたい。

先ほど、「来日直後だけではない」とのご指摘があったが、来日直後に限らず、困った状況がいつでもあるということを念頭に置きながら、日本の風習や制度に対する、親子の理解促進にもスポットライトを当てて、検討していきたい。子どもたちの指導は簡単にできる話ではなく、「18の地域毎に拠点をどう設けるか」をはじめ、支援者やメンターをどう育成していくかも重要だ。

多文化共生については、この2点に絞り議論を深めて、最終的に区長に提言する。

観光分野の協議

続いて、観光分野について、事務局から説明する。

○事務局

選定テーマは、①「多文化共生社会における観光振興のための環境づくり」及び②「新しい観光スタイルの構築」を基軸に、「シビックプライドの形成」や「区の観光資源の発掘・効果的な発信方法」等を検討」に決まった。

①のテーマについて、現在区では、大田区ウェルカムショップ等への支援や、観光案内サインの整備、観光まちづくりの支援等を実施している。

②のテーマについては、はねぴよんの活用や事業者と連携したイベントの開催等、区の魅力を内外に発信している。

①のテーマにおける課題は、在住外国人が区の観光施策に参加できる仕組みがないことが挙げられる。

②のテーマにおける課題は、区の観光資源の情報発信に外国人の目線が含まれていないこと等である。

具体策のアイデアとして、①のテーマでは、区内在住外国人によるSNS等での情報発信の促進を、②のテーマでは、他自治体と連携した大田区起点もしくは経由の観光ルート形成を例として挙げた。

○会長

議論の前提として、「外国籍住民が区の観光資源をどう捉えているか」、また、「自分たちの生活の中で楽しみになる要素を持つのか」という点の把握が難しい。委員の方は、区の観光資源についてどのようなイメージをお持ちか。

○委員

大田区の観光資源は、他の場所と比べて目立たない。池上本門寺、洗足池や羽田等の観光スポットはあるものの、それぞれの場所に繋がりがなく、1日かけて観光しようと思うことが少ない。

また、観光は「見る」だけでなく「体験」も含まれているが、大田区は「体験」型観光に力を入れていないように思う。例えば、蒲田周辺には、多国籍料理を体験できるコンテンツがあるが、あまり注目されていない。「見る」「体験する」「出会う」の3つの要素を上手に生かして繋げることで、観光の魅力が生まれてくる。

○委員

観光は「場所」が重視されることから、都心部や鎌倉、日光等への訪問が多く、大田区は注目されない。しかし、継続的に日本を訪れる人は、「文化」や「体験」にも着目すると思う。実際に、池上本門寺、穴森稲荷神社等の場所だけでなく、黒湯や蒲田周辺

の羽根つき餃子などを友人に勧めたところ、とても満足してくれた。

また、友人が訪日した際、羽田空港を必ず通過するため蒲田周辺の民宿を予約した。このような経験から、大田区は住む場所も提供できると思う。

○会長

観光の肝は、「喜んで訪れて、楽しんで帰る」ことである。今の観光は、「モノ消費」から「コト消費」に移行しており、色々な日本らしい体験をすることが重視されている。この「体験」というポイントは数多くあるのに、各々が連結できていないのが区の現状であり、これが大きな課題だ。「様々な区の資源を見直し、つなげて、どのように観光資源にしていくか」という視点が非常に重要だ。

また、羽根つき餃子のように、外国から来た人にとっては、身近なものでも何でも観光資源になるという視点から、改めて「区の宝物」を探していくことも必要になる。

機会があれば、他の国際都市おおた大使にも話を伺い、外国籍の方が実際にどう考え、これであれば参加ができるというところに結実をさせていく提言にしたい。

○委員

区の観光については、外部から指摘されることがとても多いように思う。

実際に、知り合いの餃子評論家から「蒲田と言えば餃子」と言われた経験がある。やはり「体験」は興味を持ちやすく楽しいため、この餃子にフォーカスして、スタンプラリー等を行う等、「体験」の方法は数多くあると思う。

また、区外の知り合いから「ふるさとの浜辺公園は、とても素敵な場所で驚いた」と言われたことがある。混雑していない・駅から徒歩圏内・安全な人口浜であることから、ファミリーには最適な場所だ。しかし、現状は「区の施設のひとつ」として扱われており、あまり知られていないため、見せ方を変える必要がある。工場見学においても、子どもたちだけでなく大人向けにも開催する等、見せ方を工夫することで大田区は観光資源の宝の山であると感じた。

○会長

私の友人にも、「ふるさとの浜辺公園」が好きで、多くの人に口伝いで勧めている人がいる。知らない資源をどのように発見し、どのように知ってもらうのかは、工夫が必要だ。

発見した資源は、日本人区民も利用可能と謳い、幅広に大田区民全体の宝として考えていくことも必要だ。

友人は、ふるさとの浜辺公園で仲間を増やしコミュニティを形成しており、単なる資源ではなく自分の人生の財産として捉えているようだ。このように宝物を発見するという視点を重視して考えていくと良い。

また、大田区は中小企業振興の要の地域であり、世界に冠たる技術を持つ中小企業も数多くあるため、例えば「工場見学ツアー」について検討し、実施してみてもは。企業のPRに繋がる上、ツアーを通して将来その仕事をしてみたいと思う外国籍の参加者が増える可能性もある。「工場見学ツアー」のみならず、様々な観光資源の発見・活用方法を検討していくと良い。

○委員

以前、西六郷公園（タイヤ公園）で子どもと遊んでいた際、「SNSでタイヤ公園を知り訪問した」という埼玉在住の友人に偶然遭遇した。タイヤ公園は、遠い場所から訪れる人も少なくなく、SNS（YoutubeやInstagram等）の投稿も多いことから子どもたちに大人気だと思っていた。しかし、先日別の機会で区内の小学生の発表を聞きに行った際、「公園」というテーマ発表の中でタイヤ公園が挙がらず、地元の子どもでも、離れた地域に住んでいるとタイヤ公園を知らない子もいるのだと知り、とても驚いた。タイヤ公園は、大田区外に住む人々にとっては大変珍しく、良い公園であるのに対し、地元ではあまり知られていないと感じた。

○会長

公園等の行政財産は、人々に知ってもらい且つ使ってもらうことで生きてくる。このような視点から、行政財産をどのようにPRすべきかも考えることが必要。先程触れた18の地域毎の特色ある宝物を、継続的かつ順繰りにいくつか掘り出し、区民に知ってもらうことが本質ではないか。

○委員

池上本門寺へ訪れる外国人の方も、お会式のような儀式等を知っている方は少ないように思う。ルートとして開発していくことも一案だ。

大田区は都内最多の銭湯数を誇り、特に黒湯は有名だ。銭湯も上手に活用し、地方に行かずとも東京で良い天然温泉に入ることができる旨を観光客だけでなく、区内在住外国人に対してもPRすることで、観光資源にしていくべき。大田区なりの温泉施設を創り、多種多様な食事処等を合わせれば、集客の度合いがさらに深まる。

区民が住んでいて良いと思うことは、外部の人にも魅力的に映る。特に大田区は羽田

空港があり、外国からの訪問者は必ず通るため、訪日客が区外へ行く前に「大田区でも十分観光ができる」というPRを強化していく必要がある。

令和島の活用方法についても検討の余地がある。東京湾や人口島を巡るツアーをはじめ、川崎市のような工場のライトアップツアー等を定期的で開催し深堀することで、観光資源になるのでは。観光客だけでなく、区民も楽しめる場所を創出することは、非常に面白いと思う。

○会長

「シビックプライド」のような誇りを小さいときから持っていなければ、地域への愛着心が欠けてしまう。「シビックプライド」の醸成は必要だ。日本人区民・外国人区民全体が18の地域にそれぞれ愛着を持ち、地域資源として意識することが観光に結びつくと良いと思う。

池上本門寺のお会式や工場見学の例示から、大田区に限らず、近隣区や地域と連携して観光資源を活用していくことも必要だと感じた。どちらの地域にも利するような方策を考えることは行政の視点として持っておくべき。

外国人区民が誇る地域資源は何か、行きたい場所はどこか、訪日外国人に紹介したい場所はあるか、というような視点から探すと、目新しいものを含め、隠れた資源を発掘出来るのではないか。隠れた資源を掘り起こし区の将来の財産にしていく視点から考えていくべきだ。

○委員

大田区は様々な魅力があるが、SNSを活用した観光発信が足りず、知られていないという課題がある。若者にとってSNSはとても重要で、地域の魅力や観光資源を調べる際は、InstagramやTwitter等のSNSを使うことが多い。特にInstagramは写真が主であるため、言葉が分からない外国人も「綺麗だ」と感じるができる。最近では、近代的な観光地だけでなく、自然にフォーカスした観光も人気があり、海や川などの自然や神社がある大田区は、流行に合致しているのではないか。このような点を若者向けに発信していく必要がある。

○会長

高齢者や若者も共に、区内の様々なところへ訪問することが日常的になると良い。

資源の発信については、SNS等の活用を含め、様々な方法があると思う。特にSNSでの発信は、どうしたら若年層が関心を持ってくれるのかという視点から考えていくことが

重要だ。資源は「創って良し」ではなく「使われて良し」という視点で発信内容を検討し、広くPRしていくツールとしてSNSを活用していくべき。

多文化共生社会における観光振興は、「コト消費」を含め、「新しい観光スタイル」を大田区の中でどう創造し、展開していけるかという視点から考える必要がある。その過程で、外国人区民が観光振興に携わり、外国人区民から様々な知恵をもらうことは重要だ。

また、「シビックプライド」の形成も必要であり、区の財産を知らない状況は無くすべきだ。現在認知されていない区の資源を、どう発掘し、どう資源として活かしていくのかという視点も重要だ。

今後は、このような2つのフェーズから、的を絞って議論していく。

次に産業の分野について事務局から説明する。

産業分野の協議

○事務局

選定テーマは①「「国際都市おおた」としての「区内産業の魅力の発掘・発信」および「海外企業との交流促進」等を検討」及び②「多文化共生社会における「働きやすい環境づくり」の検討」に決定した。

現状について、①のテーマは区の産業PRや羽田イノベーションシティの活用等である。

②のテーマは、大田区勤労者共済の加入促進事業など、主に中小企業の勤労者福祉の取組である。

課題について、①のテーマは、中小企業の技術をPRするための施設活用や情報発信方法の検討である。

②のテーマは、外国人従業員に対する働きやすい職場環境の検討である。

具体策のアイデアとして、①のテーマは、Pi0 PARKを活用した様々な交流イベントの開催を、②のテーマは、外国人労働者の就労状況の把握を例として挙げている。

○委員

事例として、城南信用金庫がビールやカレーを作ったり、大学と企業が一緒に新しいもの作りをする等、まちおこしも含めて大田区の技術と他県の人達とのタイアップで新しい魅力が出来つつある。

また、9月に大田区伝統工芸発展の会の展示会があり、様々な伝統工芸の紹介をしていた。こういうものを海外の方は見る機会がないので、もっと発信すると、地域産業が活発になるし、色々な気づきがあり、新たな試みにつながっていく。Pi0パークを使っていくのも面白い方法だ。

○会長

現在、国も力を入れている「スタートアップ企業」が産業振興には欠かせない。

先ほど紹介いただいたように、まだ広く知られていない部分がある。その中で、大田区内の企業が発展していく一つの方策として、例えば、「海外販路をどう拡大していくか」や、消費動向を見据えて将来の支援戦略をどう作り上げるかといった視点から考えていくことが必要だ。

日本の市場が縮小していく中で、起業してもなかなか売れ筋を探していくのは難しい。産業資源をどう活かすかというところから見直しをする。

市場を地球規模で捉えて、企業も積極的な海外展開を考えていく必要があるし、将来に向けて発展する形態でないとうとうにもならない。

HANEDAxPi0(ハネダピオ)は大きい集合施設だが、企業同士が連携している事例はあるか。

○区

まず、羽田の施設における考え方を紹介する。羽田空港沖合移転の跡地に出来ているのが、羽田イノベーションシティであり、鹿島建設をはじめとするSPC(特別目的会社)が施設を造り、そこに様々なテナントが入っている。

イノベーションシティの中の一部を大田区が床借りし、産業振興の施設として運営しているのがHANEDAxPi0(ハネダピオ)という施設である。

HANEDAxPi0(ハネダピオ)の役割は大きく分けて2つある。一つはPi0 PARKという交流空間。もう一つは、大田区が借りている床を区内企業や、外部の大手企業、海外企業等へ転貸するテナント区画。これが17区画あり、今、16区画埋まっている。イノベーションシティ全体の中では、そういった形で、大田区が一定の役割を担っている。

企業同士の交流については、例えば自動運転の実証実験、ライブハウス、飲食店等が様々な交流を行い、様々な人々の出会いの中からイノベーションを起こしていくというのが、イノベーションシティ全体のコンセプトになっている。

日本の産業と文化を世界に発信し、様々な人々の交流を通じて新しいイノベーション

を起こしていく、これが羽田イノベーションシティの大きな考え方だ。世の中に大きな影響を与えるイノベーションは、まだ出てきていないが、大田区がこの先50年間、関わっていく。その中で一つでも二つでも、世の中に大きなインパクトを与えるイノベーションを起こしていくきっかけづくりに区は一生懸命取り組んでいる。

○会長

今、話題に挙がった16社が先頭となり、願わくば、グループ同士が大きなプラットフォームになって発信をしていけることが理想だ。

世界市場を視野に入れて、どう発信をしていくか。また、入居企業が海外企業と連携を進められるような支援も必要だ。実績を集めて発信すれば、これから先、新しく入居する企業や連携する企業にアピールできる。

○委員

六郷BASEというスタートアップ企業支援向けの施設が六郷土手の近くに去年オープンした。私の会社は5月からオフィスを借りて10月までいた。入居したのは、入居者同士の交流が楽しみだったこともある。毎回イベントがあり、ほかのテナントとの交流があると聞いて行ったが、実際入居してみたところ、部品寄りのメーカーが多いので、イベントがそのようなメーカー向けの内容に偏っていたのが弱点だと思っている。また、部屋に空きがあるのに、企業に対するスクリーニングが厳しく、面接回数も多い。私たちは審査が厳しくてやっと入ったが、先ほど述べたようなことや、スタッフの通いやすさ等、様々な理由ですぐに出てしまった。最終的に別のところに移ったが、いろいろな人が入っていて、それぞれにとってメリットになるイベントがあると、もっと入居しやすいし、人を増やすことが出来ると思う。

○会長

交流スペースは、HANEDAxPi0(ハネダピオ)にとどまらず、重要な産業振興の拠点だと思う。大田区は製造業の割合が高いが、今は製造業だけでは産業は立ち行かない。製造業とサービス業が連携して初めて、市場が満足するものができる状況になりつつある。

イベント一つ企画するにしても、区内産業の魅力を発信する観点から、例えば、ある製造業の優れたところを使ってPRをする、あるいは、アフターサービスとしてこういうことが可能というようなアピールポイントを複合的に考えていくことが必要だ。海外市場へ打ち出していくのであれば、その辺りの視点がないと、海外との競争にも勝てない。

六郷BASE等のスペースは、これからは海外の事業者に入ってもらうことも含めて考え

ていくべきだ。

○委員

メカ設計の仕事でベンチャー企業に勤めている。小さい会社のため、ものを設計し、いざ作る段階になると、自分でメカを探さないといけない。私は大田区に住んでいて、大田区のものづくりがすばらしいと思っているが、ものの種類がいろいろあるから、1つ1つ全部自分で探すのはすごく面倒だ。たしかPi0ではそういうサービスを提供している。

○区

Pi0の中に大田区産業振興協会という区の外郭団体がある。そこで様々な企業の困り事や試作品開発等の相談に乗り、企業の紹介や改善のアドバイスをしている。

○委員

外国人従業員の働きやすい職場づくりについては、技能実習生に関するニュースをよく見聞きするが、大田区はどのような状況なのか。

○区

行政において、各事業所が雇用している外国人の方の詳細を全数調査することは困難であり、現状では把握できていない。各企業にどういう外国人の方を期待するか等をヒアリングをしたことはあるが、企業によって考え方は様々である。

○会長

日本全体の産業構造を考える前提として、まず、人口構成上、高齢者の方が増える一方、生産年齢人口が少なくなっていく。その中で、外国人労働者が増えていく状況は避けられない。外国人にとって、実際に働きやすい環境をどう作るのか熟考し、企業経営者の方々に知っていただくことが必要だ。

先ほど、「技能実習生」の話が出たが、実習当事者が困っている声を出しづらいのが実態だ。そういう声を聞ける環境をつくり、サポートしてあげられる人を設置できないか。

外国籍の方が他区で起業し、大田区の企業に対して関心を持ち、交流してみるとなれば、大田区にとってプラスになると思う。

○委員

私の本業はIT企業だ。ほぼフルリモートなのでオフィスは縮小しており、コワーキングスペースを借りたりしている。

先ほどの委員の指摘と同じで、コワーキングスペースやシェアオフィスを借りる時に、ビジネスパーソンがどういう施設を期待するか、もう少し意識してみてもいい。PiO PARKのホームページを見ると、みんなもっとカジュアルに、自由にコミュニケーションを楽しみたい場を求めているのに対して、正攻法で攻めているところにギャップを感じる。もう少し他のシェアオフィスやコワーキングスペースのホームページを見て研究すると、ニーズとマッチングすると思う。

大田区のものづくりという財産とIT等の新しい産業を結びつけるような企業を誘致するためには、どのような施設で、どのような見せ方をしたら彼らは興味を持つのか。他社のホームページを見ると、変わっていくと思う。PiO PARKはとても真面目な雰囲気がある。大田区は新幹線で品川にすぐ出られるし、飛行機で羽田に出られるという立地の利便性があるので、もう少し今のトレンド感を追求すると、スタートアップも含め、もっと色々な企業が誘致できるのでは。

○区

PiO PARKがコワーキングだけに特化しているわけでないのが、ほかの施設と少し違うところ。ただ、おっしゃるとおり、役所に近い産業振興協会が作るホームページなので、どうしても偏りがある。どのような打ち出し方をすれば、よりニーズを持っている方に刺さるのか、ぜひ個別にアドバイスを頂戴したい。

産業振興協会でも様々な工夫を発信しているが、なかなかターゲットに届かない部分はあると感じているので、是非アドバイスいただきたい。

○会長

起業が重要と先ほど申し上げたが、地域の中で起業していくときに、必要な各種情報を活用し切れていない場合もあると思う。「製造業の拠点としての大田区」をさらに進化させていくのであれば、こうした状況の改善は必要不可欠と思う。

シェアオフィスの関係もあるが、インターネットでの情報交換を外国籍の方同士や日本企業対外国籍の企業ができる空間が必要かもしれない。それが区内産業全体の対外的な魅力の向上につながる糧だと感じた。

議論を取りまとめる。「国際都市おおた」としての区内産業の魅力の発信や拡張をどうしていくか、あるいは海外企業との交流促進を検討することについて、様々なヒントが出てきた。

具体的には、海外企業との交流を促進していく方法について検討していきたい。

また、働きやすい環境づくりも非常に重要なので検討したい。外国籍住民が大田区の企業に勤め、働き続けていくために何ができるのか。人的資源が足りない中で非常に重要な視点になる。企業へのアウトリーチの研修も含め、どのようなサポートができるか、あるいは困り事を聞いてどう解決するのも含めて、議論を深めていきたい。

次回開催案内

○事務局

事務局から今後の日程について説明する。

次回第3回は、3月15日（水）の14時から16時まで、場所はおおた国際交流センター（Minto Ota）を予定している。出席のほどよろしくお願いしたい。

以上